

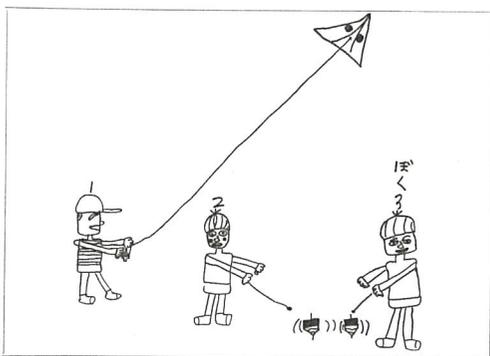
描画心理学

深田尚彦

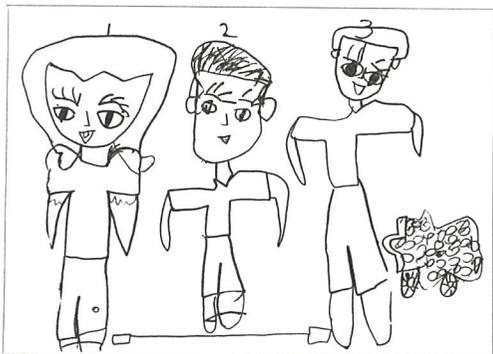
私が、大学を出て京都府立伏見児童相談所に勤めたのは、まだ巷に靴磨き少年や浮浪児が溢れていた昭和二十五年だった。私は、心理技師で浮浪児たちの心理判定をしていたので、当時開業して新しかった金子書房の本を片っ端から読んでいた。また、「難かし」い性格テストの一つとして、「児童画」を使い始めていた。更に、英米書で勉強をせねばならぬと思っていたその頃、一九五四年刊のアナスタシの「心理テスト法」を入手し、しかもそこに「絵は知能と性格の表現だ」という記述と、関係文献の表を見つけた。それは、その頃の私の興味にピッタリするものだった。直ちに京大文学部に行き、アナスタシの挙げた論文の二・三を見つけた。論文は、他の参照論文を

教えるので、それを求めて文学部や教育学部に行き、後には、文献をフィルムに納めるべく、カメラを求めて、東大にまで出かけた。新しい論文を次々に読むのが楽しく、今日に到るまで五回程位置をかえているアメリカ文化センターの、そのどこにもセッセと通った。子供の絵を用いて科学的に性格判定をしたい、という要求が、いつの間にか上述の仕儀となり、やがて論文の著者に、これこれの論文が読みたいが「日本では読めぬ」と手紙を書いた。多数のアメリカの学者たちは一公務員の私に同情してか、多くの別刷や著書を送ってくれ、なお、「ためらわず尋ねよ」とか「できる事なら援助する」と言ってくれた。やがてタイプライターを求めて手紙を書くようにし

たが、先方から論文要求のフォームを送ってくれて、こういうものを印刷しておいて要項だけ記入して送ればよいとも教えてくれた。外国の古書店で本を探してもらうようにもなったし、ブリティッシュミュージアムやアメリカの議会図書館からネガフィルムやゼロックスコピーを取りよせる事も自得した。研究に必要な多くの方法、手段を自習するのに、努力はうんとかけたが、どれにも喜びがあった。伏見の児童相談所から中央児童相談所に昭和三十一年に転任したので、京大には近く、一走り本を借りに行くには便利となった。学問研究に理解のある所長にめぐまれて、時々京大への本の借り出し、返却の時間が与えられたのは、私の幸運であった。仕事上の必要から始まり、親切な学者たちに助けられて、いつか基本文献や有力なリファレンスを知った。世界の一線の問題も了解した。ささやかな調査や研究も始めたが、いつも頼りにしていたのは世界の第一線の情報で、本と手紙だけが頼りの独り歩きであった。未知のイギリス人が別刷を貸してくれたたり、アナスタシ博士（二十年近くたって、東京での園



第1図 こま回し (小学校3年男子)



第2図 なわとびと自転車 (小学校1年女子)

際心理学会で会った時は、アメリカ心理学会々々長であったし、京都の古社寺の案内をした時には、私の研究に大きい影響を与えた前述の Psychological Testingにサインを下させた。道々聞いた話には感銘が深かった。文通のみの人ではないので、「博士」をここには添えた。からは、「せっかく求められたが、あげる別刷がないので、書き込みのある私用の所蔵版を」と送られたりした。「私の研究」というのは、私に

とってはすばらしい「一冊の本」と、それに続く多くの研究者との交流、文通で充たされている。「ほとんど失明」というグッドイナフからはドイツ語みたいな手紙や親切、歴史中の人物と思っていたエングからも論文や手紙を受け取り、来日入浴した描画心理学に関係する学者たち、アルンハイム、アルシューラー、ケロッグ等に会った日々は、私にとってすばらしい思い出であ

り、また、研究意欲を刺激してくれたものである。これらのもろもろにより、私の視野はどんどん拡げられ、(研究の焦点を定めるのに今もウロウロしているけれども) 研究や勉強は私にとっては楽しみとなった。

いまだに人に語れる程の研究成果はないが、ケロッグ、マコーバー、ピオラの本を訳したのは、私のささやかな喜びである。

一つは幼児画(特にスクリブル)の研究書、次は「描画による性格テスト法」、最後は幼児美術の開拓者「チイゼックの美術教育」書である。

海外の学者との交流の中で、共著論文がヴァインランドジャーナル(世界的に著名な精神薄弱研究誌で、昨年廃刊)に載せられたり、描画テスト法の論文集に論文を招待して貰えたり、東京の国際心理学会で会ったある博士の縁で、アメリカの心理学誌に論文が載せられたり、世界は広く、かつ狭いと思う事はしきりである。また、人間には「偶然」とか「幸運」があるとも思う。親切な研究者たちとの縁で、私は、身は家にも世界につながっていると、いつも感じていた。自分でする研究もたのしみだが、す

ばらしいアイデアと手法が展開されて行く論文読みもまた楽しみなものだ。昭和二十八年に読んだレズニコフの「家族画による性格テスト法」は、その後も私をとらえている。体系的研究をしたいと思うが、いまだにアイデアが熟さない。最近、アメリカで「家族画」の本が出たが、問題はまだ残っている。とはいうが私にもいいアイデアはない。論文を読む程にすぐれたアイデアマンが沢山いるのに驚く。フランス大学出版(P.U.F.)の何冊かの心理学書に私の論文名(樹木画の研究や家族画の研究)が出ているのをみて、論文探究をしているのは私だけではない、そして世界は狭いとまた思う。多くの学者に助けて貰ったり、教えて貰ったお返しに、多年つき合ってきた「描画心理学(こんな名前の本は外国にもない。私がいつか書きたいと思っている本の題はこれである)」の領域で少々の研究はして見たい。五年前の東京の国際心理学会で発表した研究は「絵画への性格の表現」を取扱ったものだが、その線をもう少し進めて見たい。従来の多くの研究の盲点をうまく衝いていくように思うのである。

もう一つ考えているプランは、児童の「社会性」を絵で捕えようというものである。私の推定では、描画心理学文献は世界に三千篇ぐらいある(〇)が、グループ画については、有名な社会心理学者ヘアとヘアによる一篇と筆者のものだけ。私はグループ画を体系的、組織的に研究してみたいと思っている。五十半ばに近づいてやっと一つの研究にとりかかれるというのだから恥ずかしいが、多年にわたり「知る」に溺れて「する」に欠けたのかも知れぬ。私のように一公務員として一人で道を歩いていると、こんな事にもなるのである。昭和三十六年に女子大に移ったが、前述した途上にあって、「描画心理学」を抱えてきた。講義の準備に追われ、児童のいる現場から離れたので、研究には不便になったが、最近になって少々落ち着きもどってきた。過去に習得した方法と体験のすべてを集めて考えて見たい、それも楽しみながら。京都市のある小学校の先生方が絵の蒐集に手助けして下さるので心強く思っている。

子供にこう求める。「その紙の上に、君と、君の仲よしの友だち二人と、三人で遊んでいる絵を描いて下さい」と。この指示で描かれた絵の一枚が、第一図である。番号は人物の描かれた順番であり、本人は三番目に描かれているが大きさは一番だ。小学三年男子のコマ回しの絵である。第二図は、小学一年女子の絵で縄とびである。一番に描かれた本人は最も大きく、残る二人は兄たちである。これらの三人の役割を調べ、画像の大きさ、描かれる順序、姿勢や方向、描画の訂正(これはアイデアの変更を示す)、部分の省略等を検討して、子供が感じているグループの中の地位評価を推定できないかというのが課題である。子供の絵というのは、実に多くの要因に影響される複雑なものである。どういふ課題を与えて描かせると、性格のどの側面が現れるかというのが、私の研究課題である。私の手元には海外の学者たちがサインをして送ってくれた本が少なくない。論文はもちろん数百に及ぶ。これらの諸研究者の親切に懐旧と感謝をおぼえるままに、ここには研究の内容でなく、むしろあしどりを書かせて頂いた。

(女子大学教授・心理学)